

基幹型共同研究プロジェクト

「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」

喜界島・宮古島・八丈島合同調査から

木部 暢子

《研究の概要》

グローバル化が進む中、世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009年のユネスコの発表によると、日本語方言の中では、沖縄県のほぼ全域、鹿児島県の奄美、東京都の八丈の方言が危険な状態にあるとされている。これらの方言は、古代日本語の特徴や、他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く、一地域の方言研究だけでなく、歴史言語学、一般言語学の面でも高い価値を持っている。

本プロジェクトでは、フィールドワークに実績を持つ研究者を組織して、これら危機方言の調査を行い、その特徴を記述すると同時に、言語の多様性や一般特性の解明にあたる。また、方言を映像や音声で記録し、危機方言の保存・普及を行う。

共同研究者 33名（←人数を記入）

《主要な成果物》

著書

1. 木部暢子『そうだったんだ日本語 じゃって方言な おもしとか』, 199pp. 東京:岩波書店, 2013
2. 田窪行則編『琉球列島の言語と文化 その記録と継承』, 364pp. くろしお出版, 2013
3. 沢木幹栄, 中島由美, 福嶋秩子, 岡村隆博『徳之島方言辞典作成の試み』, 徳之島方言の会, 2013年3月(予定)

論文

1. 上野善道「与論島方言のアクセント資料」, 『南島文化』, 36, 査読あり, 近刊.
2. 上野善道「喜界島方言のアクセント資料(2)」, 『国立国語研究所論集』, 6, 183-216, 査読あり, 2013年11月.
3. 金田章宏「危機言語としての八丈方言」, 明治書院『日本語学』32(10), 48-60, 査読なし, 2013.
4. Shigehisa Karimata “The Representative, Negative, Past, Continuative Forms of Miyako Verbs”, 琉球大学国際沖縄研究所『国際沖縄研究』, 第7号, 81-106, 査読あり, 2013.

5. かりまたしげひさ「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語」, 法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』, 37号, 17-38, 査読あり, 2013
6. 木部暢子 (2012)「奄美喜界島方言の母音の特徴について」, 『国語研プロジェクトレビュー』, 3(1), pp.3-14, 査読なし.
7. 木部暢子 (2012)「西南部九州2型アクセントの特性の比較—助詞・助動詞のアクセントを中心として—」『音声研究』16(1), pp.80-92, 査読あり.

調査報告書

1. 木部暢子編『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 八丈方言調査報告書』, 253pp. 2013
2. 木部暢子編『国立国語研究所共同研究報告 12-02 南琉球宮古方言調査報告書』, 285頁, 国立国語研究所, 2012
3. 木部暢子他『国立国語研究所共同研究報告 11-01 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書』, 345頁, 国立国語研究所, 2011

(<http://www.ninjal.ac.jp/endangered/report/>)

《特色ある活動》

- ① 危機方言データの記録・保存のために、1地点を集团的に調査する合同調査を毎年、行っている。これまで鹿児島県喜界島(22年)、沖縄県宮古島(23年)、東京都八丈島(24年)、鹿児島県与論・沖永良部(24年)、沖縄県久米島(25年)の6地点で合同調査を実施した。調査報告書は喜界島、宮古島、八丈島の3冊を刊行。
- ② 合同調査にあわせて、調査地で市民向けのNINJALセミナーを開催している。25年は、久米島町で「久米島・島ことば調査のつどい」を開催。約100名の一般参加があった。
- ③ 音声データの公開と英語での発信に向けて現在、準備を進めている。
- ④ 合同調査に毎回10名以上の大学院生、PDを参加させ、ベテラン研究者と組んで調査を行うことにより若手育成に努めている。

《何が分かったか、何が出来たか》

1. 喜界島調査から

調査の概要

- ・日時：2010年9月10日～14日
- ・調査地点：喜界島10地域
- ・話者数：78名
- ・調査項目：基礎語彙581単語，文法項目74例文，アクセント項目，自然談話

母音の変化について

(1.1) 喜界島方言の母音は，北部で7つ，南部で5つである。東京との対応は次の表のとおり。奄美における母音の変化は，図1のように説明されてきた。

東京	i	e	a	o	u	ai	ae	ou
喜界島北部	i	ɪ	a	u		e	ë	o
喜界島南部		i	a	u		e		o

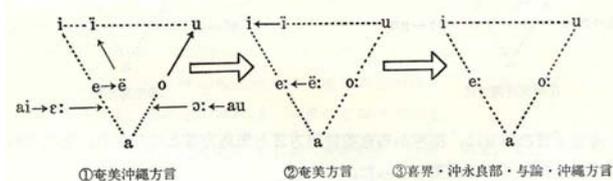


図1 奄美沖縄方言の母音の推移（中本1976より）

(1.2) 歯茎音では，母音の区別が子音の区別に引き継がれている。（喜界島南部の例）

- *i: te'i:(血) pizi(肘) n̄i(荷)¹⁾ cf. mi:(実)
- *e: ti:(手) pud̄i(筆) ni(根) mi:(目)

1) 岩倉(1977)，大野眞男(2002)参照

(1.3) ただし，s, z の場合は子音の区別がない。

- *i: ꜑uci(腰) ꜑uzi(蛆)
- *e: ꜑aci(汗) hazi(風)

(1.4) 子音の区別は母音の変化に先行して存在したと考えられる。

- *tei:(血) = tei: *pidzi(肘) = pizi *n̄i(荷) = n̄i
- *te:(手) > ti: *pude(筆) > pud̄i *ne(根) > n̄i

子音の区別のない s, z では，合流が起きた。

- *꜑uci(腰) = ꜑uci *꜑uzi(蛆) = ꜑uzi
- *꜑ace(汗) > ꜑aci *haze(風) > hazi

(1.5) 近年，歯茎音以外の子音でも，口蓋化の有無の対立と見る研究がある（白田2013）。

- | | |
|-------------|-----|
| 北部 | 南部 |
| 実：mi → mī: | mi: |
| 目：mi | mi: |

2. 八丈島調査から

調査の概要

- ・日時：2012年9月6日～8日
- ・調査地点：八丈島5地域
- ・話者数：45名
- ・調査項目：基礎語彙550単語，文法項目74例文，自然談話

60年前の国立国語研究所の八丈調査

国立国語研究所は，64年前の1949年に八丈島の言語調査を実施している。一連の地域言語の調査の最初のもの。八丈島が選ばれた理由について『八丈方言の言語調査』（3頁）に次のように書かれている。

- ・共通語を話す度合を決定する要因を調べるという目的を達するのに適した地点である。
- ・八丈島固有の言語は，かなり特殊な構造をもち，その系統もまだ不明として残されている。
- ・江戸時代からの報告が比較的多いので，歴史的に研究することも不可能ではない。

方言語彙の変遷

1949年調査では，大田南畝(1748-1823)著「一話一言」所載の「八丈方言」の語彙207語の追跡調査を実施し，全体的な傾向として，207語のうち163語(78.8%)が島のどこかで使用されているという結果が出ている。

2012年の調査語彙と「一話一言」との共通語彙は54語。これについて残存状況を見ると，

○2012年調査で残存を確認した語
 ネッコケ(小さい)，ポーケ(大きい)，シンベタ(尻)，メナダ(涙)，トンメテ(朝)，ヘベラ(着物)，ゾック(老牛)，コナサマ(蚕)……

○2012年調査で残存が確認できなかった語
 たろう(長男)，じろう(次男)，さぼう(三男)…，によこ(長女)，なか(次女)，てこ(三女)…，てて・とゝう(父)，はあ・かゝあ(母)……等

引用文献

- 岩倉市郎著，柳田国男編(1977)『喜界島方言集(復刻版)』国書刊行会(1941年初版)
- 大野眞男(2002)「奄美方言における中舌母音の歴史的層性」『国語学研究』41, 1-10
- 国立国語研究所(1950)『八丈方言の言語調査』
- 白田理人(2013)「喜界島北部諸方言の音韻体系一七母音体系 vs. 五母音体系一」琉球諸語記述研究会(九州大学2013年8月25日)